

A Study on the Personality Perception on Self and Others

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/588

自己と他者のパーソナリティ認知に関する研究

太田 雅夫

A Study on the Personality Perception of Self and Others

Masao OHTA

I 目的

「Aさんはあかるい人だ」とB氏が言うのを耳にしたC氏は、本当にA氏があかるい人だと信じてできるだろうか。この判断は、A自体の性格特性の実体、即ちAが本当にあかるいかどうかということに関係するとともに、Aの自己表現の仕方、即ちAが自分を明るく見せるための表現の仕方にも関係するし、Bの共感能力や感受性、即ちBの感じ方、受け取り方が偏っていないかどうか、妥当なものかどうかに関係する。またBの言うのを耳にしたCの受け取り方や判断のし方に関係するであろう。さらには「あかるい人」の意味するところがBとCとで共通しているか否かに係ることになる。性格特性の実体そのものを示す適切な測定値か評定値があればよいが、そのようなものは容易には見つからず、表現されたものの妥当性を確かめるには客観的な行動を手掛かりにするしかない。しかし、客観的な行動として示されるものには限りがある。やはり自己開示や自己表現の仕方に個人差もある。

「あかるい」というような性格描写は、Heider, F. (1958)のいう常識心理学に相当するであろう。しかし、自分自身についての性格描写が性格検査の結果に一致しているからといって正確な自己の性格描写であるとはいえない。性格検査それ自体が、被検査者自身の内省報告の結果であるか自己評定値と見做さざるを得ないからである。

Dymond, R. (1949, 1950)は、他者の性格の判断の正確性を用いて共感能力(empathic ability)を測定しようとした。この場合推測の正しさは、他者自身の性格評定と如何に一致しているかという点で判断しているのである。6個の評定項目について、(1)被験者の自分自身の評定、(2)他者の評定、(3)他者が他者自身をどう評定するか、(4)他者が被験者自身をどう評定するか、これらのデータから、被験者が行なった他者自身の自己評定の推測(3)と、他者が実際に行なった実際の自己評定(1)との差の得点と、他者が被験者をどう評定するか、(4)と他者が実際に被験者を評定したもの(2)との差の得点を用いた。この場合、自己評定と自己評定の推測の差と他者評定と他者評定の推測との差は、一方は自己評定の推測の正確性を示し、他方は他者評定の推測の正確性を示すものである。これら自己評定と他者評定を包括的に取り扱ったという意義は大きいと思われる。しかし、自己評定には自尊感情等の要因が作用し、他者評定には自己の他者への投影等の要因が働く、それらを考慮に入れて推測することの困難さが加わることになる。

Bem, D.J.は、自己知覚理論(self-perception theory) (1972)のなかで「個人は自分自身の態度、情動、その他の内的状態を、部分的には自分自身の外顯的行動と、この行動が起こる状況の観察から推測することによって、“知る”ようになる。従って、内的な手掛かりが弱く、

曖昧であったり、解釈できないようになると、個人は機能上、外部の観察者、つまりその人の内的状態を推測するためにそれらの同じ外的手掛かりに必然的に頼らなければならない観察者と、同じ立場におかれる。」という。自己知覚は錯誤が生じる。それは自分自身の態度や情動等の内的な状態を、自分自身の外顯的な行動を手がかりにして推論するからである。その場合、観察者が自分を見て内的状態を推論するのと同様であるとし、自己知覚と他者知覚の同等性を示した意義は大きい。が、内的状態における自己評定と他者評定の相違を自己評定、他者評定をする行動自体も行動に含めて考える必要がある。Bemの考えは、あまりにも極端な行動主義の見解という批評はうなずけるが、他者評定によってのみ、社会的効果が期待可能であるという点は認めざるを得ないであろう。

Bemは、自己知覚(self-perception)と他者知覚(interpersonal perception)は、帰属に含まれる推論過程が同じであり、行為者も観察者も共に帰属の基礎とすることができる外顯的な行動に根ざしているから類似しているという。しかし、自己帰属と他者帰属には少なくとも4つの違いが残されている。即ち内部者-外部者間差異、親密な者-見知らぬ者の差異、自己-他者の差異、行為者-観察者の差異である。これらは自己知覚と他者知覚の比較を行なう際に十分考慮しなければならないが、特にJones, E.E. & Nisbett, R.E. (1972)以後行なわれた行為者と観察者の帰属の違いがどうして生じてくるのか説明が十分なされなければならないであろう。

しかし、Hastorf, A.H.ら(1970)のいうように、知覚の安定性には二つの重要な種類があり、第一は一般的推論過程の安定性である。第二は帰属の安定性である。そして自己帰属と他者帰属は連続しているという。この知覚は他者の行動から推測され帰属され、そして他者の行動を予測するものである。したがって、他者の知覚の安定性と、他者の行動の予測の安定性には共通の要因が作用することになる。

自己評価は他者に関する情報によって影響を受ける。そして他者に関する情報が自己評価に影響する過程が問題になる。Festinger, L. (1954)によって自己の能力や意見の評価における社会的比較過程が考えられてきた。比較する者の選択等における自己評価や自己高揚の欲求、自己防衛の欲求が検討された。そして、Tesser, A. & Campbell, J. (1982)らによって自己の能力に関しての自己評価維持モデルが考案され、自己や他者の成績とその評価に関係する活動の関連性、自己と他者の心理的近さ等の要因が検討された。これらは、自己の能力の評価に限らず、自己の性格の評価に関しても当てはまるであろう。

現在はあまり自己知覚、他者知覚の正確性が検討されなくなってきた。正確な性格評定を求めようとする試み自体無謀なのかも知れない。一体自己および他者の正確な性格特徴は把握できるものであろうかという疑問は解消しない。求められるのは判断がいかなる要因によって影響を受けるか、常識心理学の範囲内での判断は、どの程度妥当なものであるかという検討であろう。

ここでは、自己知覚と他者知覚を異ならしめる要因を追求する一環として、自己評定と他者評定が如何に関連するものであるか、両者に相違が生じるとすれば認知主体による要因、認知対象による要因等、いかなる要因によって現われるか等を明らかにするための基礎的資料を示すことにある。具体的には次の諸点を明らかにしようとした。(1)自己評定および他者評定が認知対象そのものによる相違(対象差)、認知主体の違いによる相違(認知差)等をどの程度受けているか、(2)他者の性格評定に対して自己自身に関する自己の性格評定が如何に影響を及ぼすか、自己の性格評定は、他者による自分自身に対する評定といかなる関連をもつか等について検討することである。

II 方法

1. 被験者：大学2年生(教養科)53名であった。このうち交友関係調査で、片方でも「名前と顔が結びつかない」と回答した者相互を除外し、8名ずつ4グループの成員32名を分析することにした。

2. 性格認知調査：この調査は、6項目のSD法形式の評定から成っていた。(1) 自信のある—自信のない、(2) 誠実な—不誠実な、(3) 利己的な—利己的でない、(4) 友好的な—友好的でない、(5) 神経質な—神経質でない、(6) 明るい—暗い、の6項目であった。いずれも両極に向かって「当てはまる」か「ぴったりと当てはまる」と、それに「どちらでもない」を加えて5段階で評定させるものであった。各被験者に自己の性格評定とグループ内の他者それぞれの性格評定をさせた。

交友関係調査：この調査では、クラスの学生名簿を記載しておき、それぞれ「とても好きだ」から「とても嫌いだ」までの5段階の評定をさせた。なお、よく知らない学生については、あらかじめ「名前と顔が結びつかない」という欄に印を付けさせた。

3. 調査実施日：調査実施日時は1994年1月18日、11時から約20分間であった。「名前と顔が結びつかない」者相互の特定およびグループ編成のための交友関係調査は、1993年11月16日、11時30分から約15分間に実施した。

III 結果

1 認知者の自己評定、他者評定と他者の認知者評定

まず研究のねらい(1)の自己評定および他者評定が認知対象そのものによる相違(対象差)、認知主体の違いによる相違(認知差)等をどの程度受けているかについて検討することにして、自己評定と他者評定は、それぞれ異なる変数が関連する。他者評定は個々の他者に

よって、それぞれ異なる変数が関連することにもなる。しかし、ここでは認知者の自己評定との関係で、他者評定が如何になされるかという点と、認知者についての他者の評定が認知者の自己評定との関係で如何になされるかという点を調べることになる。認知者Pが他者Oに対する評定と、他者Oが認知者Pに対する評定という2者関係であれば、PとOの個人的特性(性格の特異性や評定の特徴等)によって、一致しない場合もあろう。そこで、PとOを複数にして、全体的な傾向をみることにし、認知者の自己評定、他者評定にみられる個人的特徴を除去するため、自己評価からの他者評価の偏差の平方和をみることにしよう。

各集団の認知者別に、認知者Pの自己評定からのPの他者評定の偏差(偏差の平方和)と認知者Pの自己評定からのPについての他者評定の偏差(偏差の平方和)との相関係数を示すと表1の通りとなる。なお、偏差の平方和間の相関係数より、その平方根の平均間の相関係数を用いる方が適当と思われるが、集団は同一人数の成員から編成されていることでもあり、人数平均はとらなかった。また偏差の平方和とその平方根とは異なるけれども、あまり大きな相違がないと考えて偏差の平方和で相関係数を求めた。

この結果、Pの他者評定とPについての他者の評定は正に關係することが多い。つまり、自分の個々の他者を見る見方は個々の他者が自分を見る見方と深い関連のあることが多いということになる。しかし集団毎に1名程度の認知者は低い相関か負の相関を示す成員が含まれている。正の高い相関は、他者が自己を評定することく自己が他者を評定することを示し、低い相関は、両者には異なる変数が作用することを示すと考えてよいであろう。認知者全員についての相関係数は集団Iが.461、集団IIが.745、集団IIIが.432、集団IVが.679である。

他者評定を行なうに際して、Pの自己評定の投影がなされる可能性があるし、また、Cron-

表1 認知者の他者評定と他者の認知者評定の相関係数
(集団別 認知者別)

	集団 I	集団 II	集団 III	集団 IV
認知者1	.203	.491	.252	.297
2	.708	.688	.688	.970
3	.450	.992	.972	.398
4	.972	.907	---	.796
5	.302	.628	.501	.382
6	.770	-.160	.447	.410
7	.421	.728	.850	.474
8	-.037	.408	-.140	.881

注) 認知者は各集団で任意に番号を付けたものである。
集団 III の 4 番に当たる認知者は欠席のため除外した。

表2 認知者の他者評定と他者の認知者評定の相関係数
(集団別 項目別)

	集団 I	集団 II	集団 III	集団 IV
項目 1	.417	.706	-.242	.773
2	.283	-.317	.787	.675
3	.668	.616	.931	.924
4	.800	.486	.500	-.112
5	.932	.933	.757	.217
6	-.227	.350	.731	.513

bach, L.J. (1955) の指摘したように、P の他者評定の基準が一定していないので、全般に高く評定する者、低く評定する者のあることを念頭に置いておかなければならないであろう。しかし、SD 法形式の本調査においては、評定値の個人差があまり大きくなく、認知者の他者評定の基準にあまり大きな相違はなかったようである。とはいえ、他者の自己評定を P が弁別する能力等にも個人差があることをわきまえておかなければならないが、本調査においても、この種の弁別力に個人差があると思われた。学生相互に名前と顔が一致しない者同士を除外はしたものの、親密の程度には違いがあり、どうしても他者間に弁別の難しい場合があったと思われる。

各集団の評定項目別に認知者 P の自己評定からの P の他者評定の偏差 (偏差の平方和) と認知者 P の自己評定からの P についての他者評定

(偏差の平方和) との相関係数を示すと表 2 の通りとなる。

これは各集団の評定項目別に個々の他者をみる見方と、個々の他者が自分をみる見方との間の相関である。各集団で異なる 1 項目において弱い負の相関を示すが、概ね正のかなり高い相関となることが多い。

2 認知者別 認知対象別 項目別 分散分析

次に研究のねらい (2) の他者の性格評定に

表3 集団別 分散分析表

集団 I

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	9.522	5.12	.0001***
TNO	7	11.154	6.00	.0001***
ITE	5	70.596	53.16	.0001***
HNO*TNO	48	17.418	1.25	.1338
HNO*ITE	35	21.346	2.30	.0001***
TNO*ITE	35	14.048	1.39	.075

集団 II

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	3.921	1.66	.1187
TNO	7	6.947	2.94	.0054***
ITE	5	26.013	15.40	.0001***
HNO*TNO	48	22.979	1.45	.0336*
HNO*ITE	35	15.990	1.35	.0947
TNO*ITE	35	24.231	2.22	.0002***

集団 III

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	6	3.651	1.95	.0740
TNO	6	9.509	5.07	.0001***
ITE	5	29.851	19.11	.0001***
HNO*TNO	35	9.503	.78	.8071
HNO*ITE	30	16.161	1.72	.0140*
TNO*ITE	30	18.923	2.10	.0012***

集団 IV

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	6.698	2.72	.0093***
TNO	7	5.144	2.09	.0440*
ITE	5	19.862	11.31	.0001***
HNO*TNO	48	23.434	1.35	.0731
HNO*ITE	35	22.441	1.83	.0040***
TNO*ITE	35	16.599	1.28	.1374

対して自己自身に関する自己の性格評定が如何に影響を及ぼすか、自己の性格評定は、他者による自分自身に対する評定といかなる関連をもつか等について検討することにしよう。4 集団の評定値の分散分析を行なうと、表3のとおりとなる。各項目 (ITE) の認知者 (HNO) と認知対象 (TNO) の要因からなる評定値マトリックスには、対角要素に自己評定が入れられている。

変動因のHNOは認知主体の要因、TNOは認知対象の要因、ITEは認知項目の要因であるが、これらの要因の主効果をみると、ITEは4 集団とも著しく有意である。認知項目の要因が大きいことを示している。TNO、HNOは全ての集団で有意というものではないが、有意となる場合が多い。TNOの分散がHNOの分散に比べて大きく、有意となることが多いのは、認知主体の個人差の現われより、認知対象の個人差の現われ方が顕著であることを示すと考えられる。2 要因の交互作用は、主効果の顕著な要因相互に大きいという傾向がみられる。即ち、HNOとITEの効果が有意な場合には、HNOとITEの交互作用効果が有意となる傾向が強い。

3 共分散分析の結果

ここでは、認知者の要因に基づく性格評定の回帰係数が項目毎に異なると仮定した場合、その要因の効果を除いて、なお認知対象の効果があるかどうか調べることにする。集団別に共分散分析を行なった結果は次の表4のとおりである。

認知対象間すなわちTNO間の変動が有意となる項目は、各集団で数個見受けられる。しかし全般に有意となる項目は多くない。また各集団でHNOという認知者の回帰効果も項目3、項目5、項目6において散見される。

認知対象の要因に基づく性格評定の回帰係数が項目毎に異なると仮定した場合、その要因の効果を除いて、なお認知者の効果がどれほどかを調べることにする。集団別に共分散分析を行

表4 集団別 共分散分析表

集団 I				
SV	DF	SS	F	Pr
TNO	7	3.853	1.93	.0864
HNO(1)	1	.874	3.06	.0867
TNO	7	1.354	.85	.5548
HNO(2)	1	.045	.20	.6574
TNO	7	1.772	1.49	.1960
HNO(3)	1	9.143	53.74	.0001***
TNO	7	7.246	2.75	.0180*
HNO(4)	1	.656	1.74	.1933
TNO	7	1.144	.76	.6237
HNO(5)	1	.004	.02	.8938
TNO	7	8.970	3.62	.0034***
HNO(6)	1	.480	1.36	.2501

集団 E II				
SV	DF	SS	F	Pr
TNO	7	2.479	1.68	.1367
HNO(1)	1	.016	.08	.7842
TNO	7	6.439	3.48	.0045***
HNO(2)	1	.117	.44	.5096
TNO	7	6.103	2.90	.0134*
HNO(3)	1	.091	.30	.5843
TNO	7	4.983	1.98	.0792
HNO(4)	1	.469	1.30	.2600
TNO	7	1.670	1.03	.4243
HNO(5)	1	1.619	6.98	.0112*
TNO	7	8.262	3.42	.0050***
HNO(6)	1	.871	2.52	.1192

集団 III				
SV	DF	SS	F	Pr
TNO	6	4.678	2.06	.0857
HNO(1)	1	.022	.06	.8098
TNO	6	3.760	1.72	.1470
HNO(2)	1	.452	1.24	.2732
TNO	6	.646	.86	.5320
HNO(3)	1	.017	.14	.7135
TNO	6	7.847	4.17	.0032***
HNO(4)	1	.022	.07	.7907
TNO	6	1.363	1.41	.2414
HNO(5)	1	2.807	17.39	.0002***
TNO	6	7.903	3.64	.0069***
HNO(6)	1	.276	.76	.3883

集団Ⅳ

SV	DF	SS	F	Pr
TNO	7	7.998	2.70	.0197*
HNO(1)	1	.040	.10	.7591
TNO	7	3.933	2.12	.0598
HNO(2)	1	.015	.06	.814
TNO	7	1.199	.64	.7167
HNO(3)	1	.609	2.29	.1369
TNO	7	1.359	.35	.9253
HNO(4)	1	1.799	3.26	.0777
TNO	7	5.687	2.15	.0572
HNO(5)	1	.276	.73	.3980
TNO	7	1.352	.80	.5952
HNO(6)	1	1.947	8.02	.0069***

集団Ⅲ

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	6	5.545	2.96	.0175*
TNO(1)	1	2.138	6.84	.0125*
HNO	6	3.246	1.30	.2774
TNO(2)	1	.175	.42	.5192
HNO	6	1.182	1.27	.2917
TNO(3)	1	.284	1.83	.1834
HNO	6	2.054	.88	.5186
TNO(4)	1	2.982	7.66	.0085***
HNO	6	6.015	6.19	.0001***
TNO(5)	1	.160	.98	.3270
HNO	6	1.405	.52	.7860
TNO(6)	1	3.586	8.04	.0071***

なった結果は表5のとおりである。

表5 集団別 共分散分析表

集団Ⅰ

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	5.696	3.22	.0063**
TNO(1)	1	.583	2.31	.1346
HNO	7	3.381	2.28	.0416*
TNO(2)	1	.011	.05	.8239
HNO	7	8.220	5.98	.0001***
TNO(3)	1	2.318	11.80	.0012***
HNO	7	5.013	1.83	.1008
TNO(4)	1	1.563	3.99	.0509
HNO	7	2.215	1.29	.2735
TNO(5)	1	1.297	5.28	.0255*
HNO	7	6.162	2.99	.0100**
TNO(6)	1	4.974	16.91	.0001***

集団Ⅱ

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	2.288	1.40	.2252
TNO(1)	1	.054	.23	.6316
HNO	7	3.784	1.81	.1039
TNO(2)	1	.743	2.49	.1203
HNO	7	3.520	1.38	.2319
TNO(3)	1	.583	1.60	.2110
HNO	7	4.010	1.96	.0778
TNO(4)	1	5.931	20.29	.0001***
HNO	7	3.111	1.28	.2758
TNO(5)	1	1.184	3.42	.0699
HNO	7	3.010	1.12	.3643
TNO(6)	1	4.000	10.42	.0021***

集団Ⅳ

SV	DF	SS	F	Pr
HNO	7	6.292	2.08	.0619
TNO(1)	1	4.054	9.37	.0034***
HNO	7	2.635	1.30	.2685
TNO(2)	1	2.215	7.65	.0078***
HNO	7	4.229	2.18	.0503
TNO(3)	1	.548	1.98	.1653
HNO	7	5.896	1.82	.1017
TNO(4)	1	.005	.01	.9156
HNO	7	6.065	2.35	.0363*
TNO(5)	1	.356	.96	.3303
HNO	7	4.285	2.71	.0175*
TNO(6)	1	.356	1.58	.2145

集団Ⅰでは認知者すなわちHNO間の変動が有意となる項目もあるが、その他の集団では、その変動が必ずしも有意ではない。各集団で認知対象すなわちTNOによる回帰効果が有意となる場合は項目6が多い。しかしその他の有意な項目は、集団によって必ずしも一致していない。

IV 考察

対人知覚の中で、自己および他者の性格の認知は、発達段階による相違や個人差が大きいとみられるが、正確性、妥当性、誤謬等を伴うものである。そして、常識心理学の範囲内では、そのような社会的認知に基づいて、社会的行動が出現し、社会的効果が生じるから、社会的行

動を行うに際して社会的認知の妥当性は重要な意味を持つものであることに変わりがない。自己と他者の性格評定の正確性の研究は、以前にはかなりなされてきたけれども、最近ではあまりなされていない。しかし、性格評定の妥当性に関しては検討の余地が大きいと思われる。

ここでは簡単な性格評定を自己および他者について行なった研究であるが、自己評定と他者評定との間にはある程度の類似性が認められた。SD法形式の6項目の性格評定が用いられたが、もう少し詳しい性格評定の結果を基にして調べる必要がある。

また、この研究では、認知者と認知対象の個人的特性による自己評定、他者評定への影響や認知者と認知対象間の対人関係に係わる要因を考慮にいれなかった。例えば対人好悪の要因も、重要な要因の一つであろうと考えられる。Byrne, D. (1961)は、評定尺度法で被験者Pの態度を測定し、仮想の見知らぬ人Oの態度とPの態度の類似性を操作し、類似-非類似によってOのPに対する魅力が如何に関連するかを調べた。これらByrneらの一連の研究によって、魅力と他者評価の類似性の関連が示された。今後、対人好悪の要因の性格評定に及ぼす影響等に関連させつつ検討することは必要であろう。

参考文献

- Asch, S.E.:1946, Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Beier, E.G., Rossi, A.M. & Garfield, R.L. : 1961, Similarity plus dissimilarity of personality; Basis for friendship? *Psychological Reports*, 8, 3-8
- Bem, D.J.:1972, Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* Vol 6, 1-62. Academic Press.
- Bender, I.E. and Hastorf, A.H.:1953, On measuring generalized empathic ability (social sensitivity). *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 503-506.
- Bruner, J.S. and Tagiuri, R.:1954, The perception of people. In G. Lindzey (Ed.), *Handbook of social psychology*, vol.II.
- Byrne, D.:1961, Interpersonal attraction and attitude similarity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 62, 713-715.
- Cronbach, L.J.:1955, Processes affecting scores on "understanding of others" and "assumed similarity". *Psychological Bulletin*, 52, 177-193.
- Dymond, R.F.:1949, A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Dymond, R.F.:1950, Personality and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 14, 343-350.
- Festinger, L.:1954, A theory of social comparison process. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Fiedler, F.E.:1964, A contingency model of leadership effectiveness. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*. vol.1.149-190. Academic Press.
- Hastorf, A.H. and Bender, I.E. : 1952, A caution respecting the measurement of empathic ability. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 574-576.
- Hastorf, A.H., Schneider, H.D. & Poleika, J.:1970, *Person perception*. Addison-Wesley Publishing Co., Inc., 高橋雅春訳, 1978, 「対人知覚の心理学」, 誠信書房
- Heider, F. : 1958, *The psychology of interpersonal relations*. John Wiley & Sons, Inc. 大橋正夫訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房
- Jones, E.E. & Nisbett, R.E. : 1972, The actor and observer: Divergent perceptions of the causes of behavior. In E.E. Jones, D.E. Kanouse, H.H. Kelly, R.E. Nisbett, S. Valins & B. Weiner (Eds.) *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. General Learning Press, 79-94.
- 梶田 毅一 : 1967, 自己評価と自己のパフォーマンスの評価-他者に感じる魅力を規定する要因として, *心理学研究*, 38, 63-72.
- Laing, R.D.:1961, *Self and others*. 志貴春彦, 笠原嘉訳, 1975, 自己と他者
- Markus, H. and Zajonc, R.B.: *The cognitive perspective in social psychology*. In G. Lindzey and E. Aronson (Eds.) 1985, *Handbook of social psychology* (third

- edition) Vol.1, 137-230.
- 太田雅夫：1986, 対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について.金沢大学教育学部 教育工学研究, 12, 79-91.
- 太田雅夫：1986, 対人関係の研究：自己と他者における対人認知の差異について(2).金沢大学教育学部 教科教育研究, 22, 265-270.
- 太田雅夫：1991, 集団構造に関する研究：相互選択集団における重層構造と対人関係を中心として, 金沢大学教育学部紀要, 40, 45-53.
- 太田雅夫：1992, 対人関係の研究：3者間における好悪感情の認知. 金沢大学教育学部紀要, 41, 45-54.
- Shaw, M.E. & Costanzo, P.R.:1982, Theories of social psychology.McGraw-Hill, Inc. 古畑和孝監訳 1984 社会心理学の理論, サイエンス社
- Tagiuri, R.:1952, Relational analysis :an extension of sociometric method with emphasis upon social perception. Sociometry, 15, 91-104.
- Tagiuri, R., Blake, R.R. and Bruner, J.S.:1953, Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. Journal of Abnormal and Social Psychology, 48, 585-592.
- Tesser, A. & Campbell, J.:1982, Self-evaluation maintenance and the perception of friends and strangers. Journal of Personality, 59, 261-279.